

三 日本留学時代

少年時代の夢

それは1915年のことであった。当時まだ5歳であった私は、生地パリアマンにあるミンカバウ族特有の木造家屋の真中の部屋で、母のかたわらで眠っていた。その時、こんな夢を見たのだった。

私はパリアマンとルブック・アルンを結ぶ鉄道線路と森にはさまれた小道に、一人きりで立っていた。その森は今では亡き初代副大統領のモハマッド・ハッタ博士と一緒に、日光見物をした時見たものとまったく同じだった。空は西方へ流れていく厚い黒雲に覆われていた。それは夕方5時半頃のことであったが、森はもみじの葉色でまだ明るかった。私は家に帰る道を探さなくてはならなかった。私がどこに行ってしまったのか、とても案じているであろう母のことが気になった。私はその森の中に入っていった。しかし、外に出る道は見つからなかった。森の真中で私はすすり泣いた。ふいてもふいても涙がとまらなかった。かたわらの母は私を起こし、どうして泣くのと尋ねた。私は何も答えなかった。夢うつつの中で、再び眠りに落ちた。私は夢の中でひき続き、帰り道を探していた。

どうとう私は川幅20メートルほどの小さな川のほとりに着いた。それはバタン・バンガウ川で、実際には150メートルの川幅をもっていた。その川の流れは、大きな黒い岩々の間を縫ってとても速かった。左側には橋が見え、右側は川が急角度に曲がり、視界から消えていた。あたりは次第に暗くなり始めた。午後6時半頃だった。黒い雲が西の方へ動いていくのが見えた。いまにも篠つくような雨が降りそうだった。どうしたら家に帰れるのだろうか。私はまたすすり泣いた。今度も母が、私を起こしてくれた。ねぼけまなこで返事をする、また眠りに落ちいった。

私はすでに反対側の川岸にいたが、服は濡れていなかった。私はまたまた泣き、今度も母にゆり起こされた。三たびすすり泣いたあとは、気持ちがすっきりした。それは午前3時のことだった。夢の中で「川を渡る」ということは何らかの目的、理由で「外国に行くこと」を意味していた。私にとっては、バタン・バンガウ川が太平洋を、そしてもみじの森が日本を象徴していたのだろうか。私にはよく分からない。どうして3度すすり泣いたのかもよく分からない。イスラームに拠れば、人生の全てのできごとは、良かれ悪しかれアッラーの思召しによって決められるのだ。

アッラーに導かれて神戸に第一歩をしるす

名古屋丸は1932年1月7日、午前9時、神戸港に錨を降ろした。冷たい冬の風の吹く朝

だった。税関に入った時、私は2週間前のシンガポールの税関員の無作法な態度を思い起こした。なんというサービスの違いだろう。私の荷物は丁寧に扱われ、そして数分もたたないうちに検査が終わった。

マジッド・ウスマンと私の2人は、港から3キロほど離れた、神戸館という小さな宿屋に泊った。私たちは暖く迎えられた。11時半頃、宿の女中さんが、2人の紳士が私たちに会いたがっていると、知らせてくれた。何事だろうか。警察だろうか。私たちがドアを開けると、『神戸新聞』の記者だと名のる30歳前後の2人の紳士が、私たちにインタビューを申し入れた。私たちは快くそれに応じた。

(私が覚えている限りの会見内容)

問 「いつ神戸にお着きですか。」

答 「けさの9時です。」

問 「船旅は如何でしたか。」

答 「楽しかったです。でも船酔いしました。」

問 「どこから来ましたか。」

答 「スマトラからです。」

問 「どこで教育を受けましたか。」

答 「初等、中等教育は西スマトラのパダンで、高等学校はバタビアで終えました。」

問 「日本で勉強するために来たのですか。」

答 「はい。」

問 「あなたの国の学生の多くは、どの国に留学するのですか。」

答 「オランダです。」

問 「あなたは何故オランダに行かず、日本に来たのですか。」

答 「私たちは日本の急速な発展についてたくさんのことを聞いており、日本で多くのことを学ぶことができると思っています。オランダからは機会が与えられませんでした。」

問 「あなたがたは自分の意志で来たのですか、それともどこかの組織から派遣されたのですか。」

答 「自分の意志で、自費で来ました。」

問 「お名前を教えてくださいませんか。」

答 「私はガウスで、友人はマジッド・ウスマンです。」

問 「日本に来る前に、日本語を習いましたか。」

答 「はい4ヵ月ほど。バタビアの日本人会で勉強しました。私の先生は藤原さんでした。」

問 「日本語はどうですか。」

答 「少し難しいです。」

問 「ガウスさんは何を勉強されるのですか、そしてウスマンさんは。」

答 「私は医学を志しています。」

「私は経済学を学びます」

問 「大学はすでに決まっていますか。」

答 「まだです。」

問 「下宿の方はどうですか。」

答 「東京に着いてから見つけるつもりです。私たちはバタビアにいる友人からの紹介状を持っています。」

問 「何年間勉強するつもりですか。」

答 「さあ、情況次第です。」

問 「はるか遠くの国からやって来るとは、実に勇気のある青年ですね。今は冬ですから健康に気をつけて、風邪などひかないように祈ります。あなた方の勉強が成功することを祈っています。写真を撮らせていただけますか。」

答 「はい、喜んで。」

(私たちは火鉢を囲んで座り、手をそのふちにかざし、暖をとった。)

2人の記者は満足した。そして握手をしながら「あなた方が困っているときには、誰かが助けてくれますよ」と1人が言った。「ありがとう」私は答えた。「さようなら」「さようなら」

そのインタビューは英語で行われ、45分におよんだ。そして次の朝、私たちの写真が『神戸新聞』に載っていた。

私が最も驚いたことは、どうしてこんなに早く『神戸新聞』が、私たちの到着のニュースを知っていたかということであった。まるで私たちはシンガポール、香港、神戸とずっと跡をつけられてきたかのようだった。私たちの訪日は、そんなに重大で、センセーショナルで、世界的なニュースなのだろうか。私はバタビアに日本の通信社があったかどうか知らないが[当時はなかった]、おそらくロイター通信が打電したのだろう。

私たちは2晩神戸に泊まった。畳の上に寝、朝には味噌汁を飲み、熱いお風呂にはいり、初めての冬の経験を楽しんだ。

この『神戸新聞』は『ビンタン・ティムール』紙と同じく私たちに大変好意的で、励ましの言葉をくれた。バタビアのオランダ語紙『ジャワ・ボーデ』とは大違いだった。

東京へ

マジッド・ウスマンと私は、9時の夜行列車「つばめ」に乗った。とても暗い夜で、車窓からは何も見えなかった。明け方になると、本物の富士山が威厳のある姿を現わした。私は子供の頃、近くに住む近藤夫人が見せてくれた写真を思い出した。私が最も驚いたのは、線路の排水溝の斜面にも稲が植えられていたことだった。わずか1インチの空間さえも生かされているのだ！

私たちは、1932年1月10日の7時ちょうどに東京駅に着いた。マジッド・ウスマンは佐立氏の家に行き、私は丸ノ内の南洋協会に谷口氏を訪ねた。私はシンガポールで会ったこと

のある、協会専務の飯泉三郎氏に挨拶した。谷口氏は、私を上野・桜木町にあるブルワダルミンタ先生の家に連れて行ってくれた。私は鳥居御嶽氏 [1931～35年、東京外国語大学講師] の紹介で、大村さんの家に下宿するまで数週間、ブルワダルミンタ家にお世話になった。ブルワダルミンタ先生は蘭印政庁から派遣され、当時神田一橋にあった東京外国語学校（現東京外国語大学）のマレー語の講師をしていた。先生は夫人と6歳になるスタントリという男の子、それにジャワから連れてきたお手伝いと4人で暮らしていた。

私がブルワダルミンタ先生のところから、同じ上野・桜木町の、1.5キロほど離れた大村さんの家に引越したのは、1932年の1月末のことであった。隣室には日本人学生の森君が下宿していた。私は彼にオランダ語を教え、その代わりに彼から日本語の手ほどきを受けた。

大村さんは、マラヤのペラク州のイポーで写真館を営んでいたことがあり、夫妻とも流暢にマレー語を話すことができた。大村さんを紹介してくれた鳥居御嶽氏は、ブルワダルミンタ先生と同じ東京外国語学校のマレー語の講師だった。マレー研究者として知られ、とくにマレーの言語、文化、歴史を研究しており、ブルネイとマラヤに行ったこともあった。

隅々まで整えられた清潔な木造りの日本家屋に初めてはいったとき、私は心が落ち着かなかった。日本では礼儀にかなった正しい挨拶が、伝統や風俗習慣に従ってきちんと守られているものだということを聞いていたからだ。できるだけ早く新しい雰囲気、それ相応に順応しなくてはと思った。「おはようございます」「いただきます」「ごちそうさまでした」「行ってまいります」「気をつけて下さい」「ただいま」「おやすみなさい」「ありがとうございます」「ごめんください」等々、きちんと頭をさげて挨拶した。はじめのうちは、外から見ると重苦しく“窮屈”に感じられるかもしれない。しかし反面、どんな学生も、外国にいれば必要とするようなしつけや理解を学び、社会的な幸せもあった。時が経つにしたがって、この儀礼的、倫理的リズムに慣れてきた。それは東洋的な雰囲気であり、西洋のものではない。9歳のとき、しばらくの間ホーヘンダム夫妻やエンゲル夫妻の家に頂けられたことがあるが、そのときの雰囲気とは大変な違いであった。

私は畳の座布団の上に、15分以上正座していると足がしびれた。夜は厚い毛布を掛け、足もとには体を暖めるため湯たんぽを置いて寝た。押入れつきの4帖の小さな部屋が与えられ、そこが寝たり勉強したりの場となった。朝夕の食事つきで、1ヵ月35円の下宿代であった。

子供のいない大村夫妻は、私を本当の息子のようにかわいがってくれ、私も2人を両親のように慕った。私に注がれる親の愛を深く感じた。郷里を発つにあたって、私は長老たちから、外国に行ったら良い親代わりを見つけなさい、と言われていた。私にとっては、大村夫妻が、日本での最初の導き手であった。

ある朝、私たちが朝食をとっていたときの出来事だった。大村夫人が私のご飯をよそって、ご飯粒を畳に落とした。夫人は顔色を変え、しゃもじをおひつに置き、ご飯を指で

そっと拾って口にもっていった。彼女は青ざめ、おびえたように頭を下げた。大村さんは怒りを抑えながら夫人をにらみつけた。夫人は今にも泣き出しそうに顔を赤らめた。驚いて彼女の顔を見ているうちに、私は5歳のとき、ご飯を床に落して、母に左の太腿をびしゃりと打たれたことを思い出した。私は指でご飯を拾って、お皿のふちに置いた。母は、一粒のお米を手に入れるのに、お百姓さんは一年も待つのですよとか、踏みつけるとお米が泣きますよとか、将来生活に困りますよ、などとよく言っていた。夫人はご飯が落ちたとき、何を思ったのだろう。きっと世代から世代へと受け継がれた、これと同じ解釈だろう。稲作社会の文化には、相共通するものがあるのかもしれない。

こうしたこともあって、私自身はますます大村夫妻と一緒に生活することを、心地よく、嬉しく思った。最初数ヶ月間のホームシックも、軽いものですんだ。「こぼれたご飯に感謝しなさい」「郷に入りては郷に従え」、マレーの諺では「虎のおりでは吠え、山羊のおりではメーと鳴く」と言う。

最初の衝撃と感銘はお風呂屋で

私は週に2、3度10銭を払って、昼か夜に近くのお風呂屋に行った。私が入るのは、ほどよい熱さの子供用の浴槽だった。が、それでもその熱さに10分以上がまんできず、頭がくらくなり、汗が流れ出た。

私はお風呂の中で子供たちと話をするのが大好きで、彼らの名前や年齢、住んでいる場所、学校のこと、学年などをあれこれと尋ねた。ある子供に将来何になりたいかと尋ねたとき、私は非常なショックを受けた。「兵隊」、とその子は得意気に元気よく答えたのだった。私は深い感嘆の念で彼を見つめ、「どうして」とやさしく尋ねた。すると同じようにはっきりと「お国の為に支那[中国]へ行きたい」と答えた。私はその子が何を思っているのか、よく分かった。10歳の小学生の子は、医者か技術者か実業家になりたがるものだと思っていた。「兵隊さん」という言葉は何日もの間、耳の中で鳴っていた。私は、自分の国に尽くそうというのは、その子だけではないと思った。オランダ植民地から来た留学生である私にとっては、それはとても興味深いことだった。私は機会さえあれば、上野・桜木町や淀橋[新宿]で、10歳前後の子供たちに、同じような質問をくり返した。そして、10人以上の小学生から同じような答を得た。何人かはきわめて愛国心旺盛で、「支那人は嫌いだ」とまで言った。

同じ年頃の女の子についてはどうだったろうか。私が郵便局や市電の停留所やお菓子屋さんなどで聞いてみたうち、6人ほどはやさしく控え目な声で、「看護婦になって、負傷した日本の兵隊さんを治療したい」と答えた。私は再び、もっと激しいショックを受けた。そのような返事をまったく予期していなかった。私は彼女たちが、学校の教師、薬剤師、助産婦、あるいは看護婦でも従軍看護婦ではなく、老人や病気の子供の世話をする普通の病院の看護婦になりたい、と答えるかと思っていた。

私は留学生仲間のサリム・ソンカル、スギト、バスリなどに、答が皆同じ「兵隊さんと看護婦さん」であることを、どう思うかと尋ねてみた。彼らほうなづきながら「それこそが、私たちが必要としている本当の民族精神だ」「幼い頃から、家庭や学校で培われた精神だ」と口々に述べた。いずれにしても、日本人の子供の希望は、子供の世界の歴史では独特のものだと言えよう。

日本語の学習

私は日本語をできるだけ早くマスターするよう、一生懸命勉強しなければならなかった。そうすれば人々の慣習、習慣が分かって、私の日本での生活はより楽しいものになり、自分を異邦人と感じなくてすむのだ。下宿の隣室に森君が住んでいたのは幸いだった。前にも述べたように、彼はオランダ語をとても習いたがっていたので、私が彼にオランダ語を教え、彼が私に日本語を教えた。こうして日常会話にはほとんど不便を感じないほど日本語が上達した。また、週に2回ほど、東京外国語学校のマレー語科の学生で、マラヤに行きかっていた中山君が日本語を教えてくれ、そのお礼に、私は彼にマレー語を教えた。

最も難しかったのは、8画以上の、きまった書き順をもっている漢字を、いかに覚えるかということだった。漢字自体は、絵のようであった。いったん絵の意味がわかれば、そう簡単には忘れなかった。いかにして字画を整えて書くか、私は繰り返し、わら半紙に絵のような漢字を書いた。そしてそれが正しいかどうか確かめ、もしおかしければ、再び字画を整えるようにした。今日、すべての絵が目の中にはっきりしていても、次の日には1、2画抜けて忘れては立ち往生してしまい、先に進めなくなった。何度も何度もわら半紙に書いて、やっと1日に5個の漢字を覚えたとしても、1ヵ月に、5×30、つまり150の漢字を覚えられるということではない。そのうちの25～30パーセントマスターできれば幸いであった。日本語の新聞を読むには、少なくとも2000字をマスターしなくてはならないと言われていた。漢字は、とても体系的に整っており、図形を勉強するようだった。しかし2つ3つ漢字がつながると、意味をとるのに四苦八苦しなくてはならなかった。銀座に行く市電やバスの中で、左手にメモ用紙、右手に鉛筆を持ち、大きな看板を見ては、繰り返し書いてみた。途中で行き詰まると、左の手をこすって、またやり直した。美しい商品の並んだショウウィンドウを見ながら、まさに“一石二鳥”だった。ガイドブックはRose-Innesで、桃太郎の話がおもしろかった。しかし、小学校の読本のみで勉強したので、時間がかかった。

上智大学に入学

私は自分の非常に限られた時間を計算しなくてはならなかった。少なくとも1日、3時間を日本語の勉強にさかなくてはならなかった。残りの時間を、動物園や美術館、図書館や博物館に行ったり、上野池之端で子供たちのタコ上げを見たり、松坂屋で買物をしたり、上野公園の桜を楽しんだりするわけにはいかなかった。私は上智大学を志望することにした。慈恵

会医科大学はもう始まっていて、その年は入学できなかった。私は手続きが遅かったし、手助けしてくれる友人もいなかった。私はもう一年待たなければならなかったが、それでも医学を勉強したいという決心は変えなかった。

無事上智大学に入学を許され、4月末から哲学、心理学、経済学の講義に出席し始めた。教授や級友は、教育水準がどの程度か見当もつかないスマトラからの留学生である私を、珍しがって見た。授業はドイツ語で行われた。そのため、私はすべての講義にしっかりとついて行けたが、32人の級友にはそれが信じられなかった。ある時ギリシャ哲学の講義で、シュミット教授が私にその課題についての一節を読むように言った。私はオランダ語の抑揚とドイツ語の発音で読んだ。少しもつかえるところがなく、あたかも子供の頃から習っている言葉のように読みはスムーズで正確だった。他の級友とは大違いであった。その読みのお陰で、私は教授や級友から一目置かれる存在になった。級友たちは、私がドイツ語を、どこでどれくらい習ったか好奇心で知りたがった。私は「バダンの中学校で3年、バタビアの高等学校でも3年。ドイツ語だけでなく、他に、フランス語、英語、オランダ語も子供の頃から勉強していた」と答えた。彼らは私を称賛した。

私は哲学科の学生だった大木リュウゾウ君ととても親しかった。学長のヘルマン・ホフマン教授、ファン・クレンベルフ教授、シュミット教授、クルッツ教授などと私との関係は、まるで親子のようだった。1933年末に、それらの科目を終えた。私の意図は父との約束通り、医学の勉強をすることだった[前年1932年軍部との間に参拝をめぐる「上智大学靖国事件」が発生している。ホフマン学長らの対応については、リンダ・グローブ「一九三二年上智大学靖国事件」中野晃一他編『ヤスクニとむきあう』めこん、2001年参照]。

大木君の紹介で、私は内幸町の大阪ビルの5階にあった日本文化連盟に出入りするようになった。そこで私はインド、タイ、フィリピン、仏領インドシナ、アフガニスタンといったアジア諸国の留学生や、フランス人のノエルさん、ドイツ人のピボンさんとも知り合うようになった。毎週金曜日の夕方、5時から7時までそこで講義があり私は欠席したことがなかった。また毎月1度、同じ大阪ビルのレインボーグリルで夕食会があった。話題は、おのおの国の風俗習慣、伝統などについてで、政治問題について話す者はいなかった。夕食後は、故国の民謡を歌って、よりなごやかな雰囲気をつくり出した。シメタウエーヤ氏は甘いタイの歌を歌い、パンデ氏は意気盛んな民族の歌、ファンデ・マタラムを、ガルシア氏はタガログの民謡を、そして私は「わがいとこのスマトラ」を歌った。それはとても楽しい雰囲気だった。この夕食会には、松本学理事長や日本文化連盟の職員もよく出席していた。

桜の季節には、多摩川などへピクニックに行った。桜は一度に開花し、しかも同時に散るので、日本の国民精神の“一体性”を象徴するものと聞かされた。桜並木の景色は明るく、みずみずしく、壮観だった。私は1920年、10歳のとき近藤夫人に見せてもらった写真を思い出した。

日本文化についての講義に出ることで、私はさらに幅広い知識を身につけようとした。私

は日本文化連盟に、祖国から来た人たちを、よくつれていった。その中には、アフマッド・スバルジョ法学士（初代外務大臣）夫妻、ラティブ医師の夫人と二人の娘、ヘラワティとサプタリタ、スジョノ法学士夫妻などもいた。スジョノ氏は、1938年、帰国したプルワダルミンタ先生に代わって東京外国語学校のマレー語の講師となった。また植民地参議会（フォルクスラート）の有力議員であったスカルジョ氏夫妻も、日本文化連盟に紹介した。

日本文化の講義は非常に深遠なもので、皇道精神、武士道、家族主義、日本精神、愛国主義、神道、日本仏教、忠誠、道、天、むすび、八紘一宇等といったテーマは、理解するのがむずかしかった。これらの概念は、日本人自身が英語に翻訳したとしても、外国人には正確に理解できにくいものであった。

講師として来られたのは英仏独語に通じた藤沢親雄教授、ドイツ留学の長い日本憲法の専門家大串兎代夫教授、アメリカ留学帰りの社会学者石川教授、経済学者で英語が堪能な川原教授などであった。講義は全て英語で行われた。女性のためには華道があって、ドイツ大使夫人ヘレン・オットーさんはいつも出席していた。一番興味を抱いた講演は、アフガニスタンのマヘンドラ・プラタップ氏のものだった。彼は、一つの世界家族の形成と世界平和実現のため、ホノルルに首都を持つ世界国家の設立を提唱した。プラタップ氏によれば、人類はみな全能なる神の創造物である。国境も、イデオロギーも、政治や宗教や文化の対立も、支配も、闘争もあってはならない。そうしてこそはじめて恒久的な世界平和が確立される。世界のだれもが兄弟や姉妹だ……というのであった。

マヘンドラ・プラタップ氏は、反英国の民族主義者で日本に亡命していたインドのR.ビハーリー・ボース氏と同様、急進的で愛国的な民族主義者であった。ボース氏はよく集まりに、ちょっとした間だが顔を出した。日本文化連盟の機関誌は、世界の大学、高等教育機関、文化機関あるいは外交関係者などに配布されていた。文化交流や相互理解・尊敬を深めることによってのみ世界平和は達成される、というのが日本文化連盟の考え方だった。理事長は貴族院議員の松本学氏だった。この松本先生の尽力で、私は翌1934年4月に、慈恵会医科大学に入学を許されたのだった。日本での学生生活において、私はいつも積極的に活動した。松本先生は、私の指導者であった。私はドイツ語を良く知っていたために、知的な集まりからは高く評価されていた。

在日インドネシア人の組織サレカット・インドネシア

1933年3月、日本は国際連盟を脱退しアジアに回帰した。アジアのほとんどの国は、ヨーロッパの帝国主義支配下にあった。しかし、アジアは目覚めていた。民族主義者の志気は高く、植民地主義からの独立と自由を目指していた。日本のアジア主義運動は、アジアの団結、アジアの一体性、アジアのためのアジアという思想を掲げて進んでいた。アジア諸国の留学生は、岩田氏に組織された亜細亜会、小林氏（シンガポールで会ったことのある）による亜細亜協会、市川氏による亜細亜青年連盟のもとに集まった。そうした中で、最も強力に

運動を推進していたのは、内幸町大阪ビル三階にあった大亜細亜協会であった。中谷武世氏が協会事務局長をしていた [中谷武世『昭和動乱期の回想(上・下) 中谷武世回顧録』泰流社、1989年参照]。私たちは、自分たちの国の民族主義運動、植民地政策、民衆の苦しみや、犠牲の状況などを紹介し、お互いに意見交換を行った。私はよく中谷氏の事務所を訪ねいつも歓迎してもらったが、そのような時は深刻な政治の話などはしなかった。

インドネシアから日本に留学する学生が、年々増えてきた。アミル・ハッサン(経済学)、ルスリ(技術)、スウィット(化学)、スギト(技術)、サリム(商学)、ユスフ・ハッサン(経済学)、スミント(商学)、ユリー(経済学)、バスリ(技術)、マスフッド(ジャーナリズム)、アルカマル(製陶術、於名古屋)、スティブヨ(工学、於大阪)、ウマルヤディ(経済学)、などであった。また、ハッサン・バスリ、ジョハン、ジョン・ライス、マリオノは高校生であった。私たちはよく、上野のプルワダルミンタ先生の家を集まった。

1933年の末、私たちはいつものように、プルワダルミンタ先生の家で集まりを開いた。私が留学生の親睦団体を創ろうという提案をして、それが支持された。その目的は、インドネシア各地から来た留学生の団結をつちかい、必要に応じて互いに助け合い、新しく来た留学生や訪問者の便宜をはかり、インドネシアの民族と国家の名声を高める、というものであった。それは政治団体ではなかった。私たちはオランダ領事館からの干渉を好まなかったし、新たに日本へ留学する道が閉ざされることを恐れたからである。しかし、個人の責任による個々の活動は、直接、間接に祖国の大義にかかわる行動であっても、何ら制限することをしなかった。

この友好を目的とした留学生会は、私を会長にマジッド・ウスマンを書記に選び、プルワダルミンタ先生に会計をお願いしたが、何らの規則規約といったものをつくらなかった。集会にはアミル・ハッサンやルスリも出席し、この2人を含めた私達5人を、私は“ビッグ・ファイブ”と呼んだ。

私たちが、個人的に“すべきこと”と思ったことは、日本人から良く出される、次のような質問にはっきりした答を与えることであった。

- ・インドネシアはどこにあるのか。
- ・インドネシアはインドの一部か、それともポリネシアの一部か。
- ・インドネシアはアフリカ大陸にあるのか、それともインドシナ半島の一部か。
- ・インドネシアはマダガスカル島の近くか。
- ・インドネシアには虎やワニがたくさんいるのか、等等。

しかし、時には力づけられるような意見もあった。「インドネシアのように大きな国が、5000マイルも離れている小さな国に支配されるなんて信じられない！ 早稲田の学生の力だけでも、オランダなんか一掃できるさ！」

日本の新聞、雑誌、小冊子などでは、東南アジアの人々をさす「土人」という言葉が使われていた。私たちは、彼らをとがめることはできない。私たち一人一人の義務は、上手に説

明すること、そして耐えることであった。それが“支配されている民”としての報いであった。

私たちは3ヵ月に一度、「ブリタ・インドネシア」というタイプ印刷のニュースレターを発行した。山路^(音譯)円次氏は日本語の「頭」と、マレー語の頭を意味する「ウタマ」との言語上の関連性や、ジャカルタという言葉はもともとジャガイモであったこと、あるいは馬は南方から来たとか、稲作は南方から導入されたことなど、日本文化の起源について書いた。プルワダルミンタ先生はインドネシア語について書き、私は「国土」と「人間」と「時間」の一体化について書いた。私たちはそれを日本を訪れた友人達や、バタビアの『ビンタン・ティムール』紙、パダンの『ラジオ』紙に送付した。

オランダ領事館の反応はどうであったか。私にはよくわからなかったが、私たちの行動は、きっと綿密に調べられていたことだろう。

インドネシアからの留学生は、サレカット・インドネシア（インドネシア同盟）の会員として拘束を受けることはなかった。サレカット・インドネシアは、一定の組織綱領をもつ団体ではなかった。私たちは、各々の心の中で一つに結びつけられていただけであった。

インドネシアでは「血肉を一つにし、祖国と民族を同じくする」という感情は、きわめて力強い統一促進力であることを私たちは認識していた。このことは、民族と祖国の名誉を守らねばならない、という民族的自覚を産み出した。口でいうのはやさしいが、その通りに実行するにはきびしい自己規制が必要であった。

新しい環境に適応し、日本人の慣習を尊重し、建設的な交友関係を模索し、さらには知識や経験をふやさなければならなかった。日本人は、一般的にアジア諸国の出来事に関心を寄せていた。

サレカット・インドネシアは、めったに会合を開くことはなく、1年に数度あるかないかであった。年次総会のかわりに祝日に集まることが多く、そのような時にはプルワダルミンタ先生の家が使われた。そして日頃なかなか顔を合わすことができないのを、お互いにわびたり、各人の日常生活や体験について意見を交換するのだった。

会費は月決めであったが、よく3、4ヵ月分まとめて払った。そしてその後は忘れてしまうものが多かった。会食するような場合には、客人側が財布の口を開けるのがつねだった。私たちは、行き帰りのバスや電車賃を自弁で払うだけであった。

私が知っている限り、サレカット・インドネシアは日本の政治団体や社会・文化団体から、公式の招待状を受けるといようなことはなかった。また私たちの方から、こうした団体を招いて政治や社会や文化の諸問題を討論する、といようなこともなかった。個人的にはユスフ・ハッサンのように、黒龍会と関わりをもったり、私のように大亜細亜協会や日本文化連盟に関係したものはいた。しかし、このことはサレカット・インドネシア自体が、これらの団体の政治活動に巻き込まれたことを意味するものではなかった。私たちは、自分たちの分限をまもり、勉強に打ち込むべきということを知っていた。日本の諸団体との個人的

な関係というのは、現実的な政治面での関わりではなく、イデオロギーや理念にもとづくものであった [サレカット・インドネシアについては、後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』勁草書房、1985年、第13章を参照]。

ある友人から得た情報によれば、警察の一部局が、日本に学ぶ留学生の動向を監視しているとのことであった。彼らが知りたがっているのは、共産主義への傾斜、あるいは朝鮮人の交友についてであった。さらに彼らは、留学生が勤勉に勉強しているかどうか、ダンス・ホールやカフェ、喫茶店などでブラブラ遊んでいないかを調べる、ということだった。

もしその学生が勉強に精出さず、遊びまわっていることが判明した場合には、警察から大学当局に連絡が入るのであった。さらにそれだけにとどまらず、その件は、一般の人々の耳にも入るのであった。その学生一人が物笑いの種になるのではなく、彼の祖国や民族の名をも汚すことになるのだった。いわば歴史に記録されることになるのであった。

私が知る範囲では、インドネシアから来た留学生は、おおむね真面目に勉強し、名誉を汚すようなことはなかったといってよかった。インドネシア人留学生は、警察を恐れていた。「お巡りさん」という言葉を聞くと、私たちは震えあがった。「お巡りさん」と顔を合わせる時は、頭を下げることを忘れなかった。

日本の巡査は、蘭印の警官とは大ちがいであった。蘭印の警官は荒っぽく、意地悪く、一般民衆の憎悪の対象となっていた。彼らには「オランダの犬」というあだ名がつけられているほどだった。

大亜細亜大会での演説

名前は思い出せないが、ある人おそらく大亜細亜協会のスタッフが、協会の中谷武世氏が私に会いたがっているむね知らせてくれた。私が早速出向くと、中谷氏は2週間後に日比谷公会堂で大亜細亜大会が開催 [1935年] されるので、インドネシア代表として何か話をしてくれるよう、私に頼んだ。私は大喜びで引き受けたが、何日か後になって、私にはインドネシアを代表するだけの力がないことを認識した。私でなく、誰か他にふさわしい人がいるのではないだろうか、と思った。私はたんなる留学生で、インドネシアの政治団体とは何の関係もないのだ。蘭印政庁は、私に対して強硬な手段をとることが予想された。そうなれば私の勉強はどうなるのだろうか。たとえ、話を引受けたとしても、私の日本語で大丈夫だろうか。その大会で何をしゃべるかは問題でなかった。私は、パダンやバタビアで聞いた民族主義運動の指導者の話を繰り返せばよかった。また、「静かな抵抗者」として、全アジアに、特に日本に、インドネシアとインドネシア人の実情を紹介する絶好の機会でもあった。結果はどうあれ、演説を引き受けようと思った。私はローマ字でスピーチを準備し、友人の大木君が親切に文章を直してくれた。私は自分の演説が、聴く人々にはっきり理解してもらえることを祈った。

大亜細亜大会が開かれた日は、晴れた土曜日だった。当日の12時、私は丸の内レストラ

ンにいた。『ビンタン・ティムール』紙のパラダ・ハラハップ氏を団長とする訪日商業視察団が、石原産業の接待を受けていた。私は大会に出席しなければならないので、その場を辞した。一行はひそひそとささやきあった。彼らも大会に出席したく、できるだけ早くその席を切り上げたいと思っていたのだ。この大会は、インドネシアでは世間を驚かす大ニュースに違いないし、オランダにとっては好ましからざるものであろう。

私は大会会場に45分遅れて到着し、R. ビハーリー・ボース氏の隣に座った。会場には大きな日の丸の旗が掲げられていた。来賓席に座っているのは誰だか分からなかったが、おそらく陸軍か海軍の首脳か政治家であつたろう。私は頭山満翁の姿を見つけ、中谷氏にも挨拶した。インド、フィリピン、インドシナ、アフガニスタンからの代表が来ていた。私は落ち着いて自分のスピーチの順番を待っていた。私はまず、1908年の最初の民族主義的な組織ブディ・ウトモ、オランダでのインドネシア留学生による民族主義運動「インドネシア協会」の歴史的背景から話を始めた。ついでスカルノとハッタの指導のもとに、4500万の人々が独立に向けて強く団結していること、300年ものオランダ植民地支配は苦難と悲惨をもたらしたこと、オランダの鉄拳政策が民族主義的な高揚を抑圧したこと、家宅搜索、逮捕、尋問、裁判なしの投獄や刑罰は、政治警察の常套手段であること、言論、集会、出版の自由はないことなどを話した。そして「独立は全世界の国民の生得の権利です。私たちは他の国民と同じように独立したいのです。誰もそれを抑えることはできません。力を合わせましょう。力を合わせて新しいアジアを築きましょう。アジアは一つです」としめくくった。私は満場の聴衆から熱狂的な拍手を受けた。こうして大会は無事終わり、閉会式では、頭山満翁の音頭で、万歳が三唱された。

私が演壇を降りると、パラダ・ハラハップ氏、スカルノ氏（後の大統領）の右腕のガトット・マンクプラジャ氏、それにスイブ氏などが入口近くに立っているのが見えた。彼らは席に着いてはいなかったが、ともかく傍聴することはできたのだ。私は一行から祝福され、賞賛された。私たちは、満足感にひたりながら談笑した。パラダ・ハラハップ氏は、私の肩をたたきながら「よくやった」と言ってくれた。私たちは握手をして別れた。私は「小さなボース」と呼ばれるようになった [『亜細亜主義』1935年3月号に「亜細亜民族運動座談会」の記録が収録され、ガウス氏もマジッド・ウスマンと共にインドネシア代表として発言している]。

事前に言われていた通り、スピーチは日本放送協会を通じて日本中に放送された。私は祖国のため神聖なる使命を果たしたのだ。それは私の第三の“栄光の時”で、1933年末、23歳のときだった。

その時、私は東京慈恵会医科大学の2年生であった。

それからしばらくの間、私はびくびくと不安にかられながら授業に出た。初めの2週間は、大亜細亜大会でのスピーチのことを級友と話さないよう、務めておとなしくしていた。私は学長の金杉教授が、その一件に気がついていないことを祈った。私の良心は、留学生には危

険なことだから政治と学業を混同すべきではないと言っていた。教授たちは相変わらず親切だった。彼らが私の行動を評価していたのかどうかは分からない。いつまで秘密にしておくことができるだろうか。すでにラジオで全国に放送されているのだ。内務省は、どんな反応を示すだろうか。大学から警告を受けたり、退学処分になったりするだろうか。スピーチ後の1ヵ月間は気が気ではなかった。私の知る限りでは、西欧の植地支配を非難するあのよう
に大きな大会で、私のような激しい反帝国主義的な演説をしたアジア人留学生はいなかった。つとめて冷静をよそおいながら、私は辛抱強く、大胆、無謀な行動に対する内務省や大学からの反応を待った。

ひと月が過ぎ、少し気が楽になった。また一方では、大会から1週間後、陽気な川端君は暖く握手を求め、私の演説を「ご成功おめでとうございます」と言って祝福してくれた。そして英語で「アジアのためのアジア、アジアは一つです」とも言った。彼は高らかに笑い、私も嬉しかった。その場にいた級友たちも一緒に笑った。川端君は会うたびに、このおめでとうを繰り返した。川端君は、「アジアは一つだ」「アジアはアジアの為に」という精神を強く持った人だという印象を受けた。他にも高橋君、柴田君、鈴木君、三角君ら大勢の級友が、それを評価して明るく笑いかけてくれた。生物組織学の村田教授の後輩にあたる林教授は、私によくジャワのことを尋ねた。先生はジャワの影絵芝居を高く評価しており、ある日曜の朝、50センチほどのワヤン・クリットの人形をプレゼントとして持ってご自宅を訪ねると、先生は非常に喜んでくれた。奥さまはにっこり笑って「きれいですね、珍しいわ」とおっしゃった。私は本当に嬉しくて、1時間近く楽しく談笑した。林先生と奥さまは、何度も何度もお礼を言った。

よくやったという賞賛と、不安な雰囲気の中で勉強しているうちに、数ヵ月が過ぎた。が、まだ、私のしたことに対する何の処分決定もなかった。私は非常に安心した。ともかく私に共鳴してくれる教授がいたのだ。何年か経つうちに、ほとんどの教授が皆私に深い愛情を持ってくれていることが分かった。

オランダ総領事館からの呼び出し

私は淀橋の亜細亜学生寮に引越した。それはR.ビハーリー・ボース氏が、アジア人留学生のためにつくった宿舎だった。私の下宿仲間は、日本語を勉強しているパンデ君、技術のレイ君、柔道のカネワレ君、経済のタス君、喘息にかかって帰国したロイ君などであった。

ある日、プルワダルミンタ先生を訪ねると、スミント君が来ていた。スミント君は、オランダ総領事館が私と面会したがつていると言った。驚いてそのわけを聞くと、彼は「分からない」と答えた。都合のよい時いつ来てもよい、とのことだった。まず頭に浮かんだのは、父に何か良くない事があって、彼が私を帰国させるよう領事館に頼んだのではないか、ということだった。次の日10時に、丸ノ内の赤レンガ街にあった総領事館に出向いた。一人の館員(名前は失念した)は私に座るように言った。

(私が覚えている限りの問答)

問 「日本に来てどのくらいになりますか。」

答 「2年半です。」

問 「着いてからどこに滞在しましたか。」

答 「日本人の家庭に下宿しました。」

問 「出身はどこですか。」

答 「スマトラのパダンです。」

問 「自分の意志で来たのですか。」

答 「はい、自費で来ました。」

問 「父君は何をしていますか。」

答 「父は織物商です。」

問 「日本人の友達がたくさんいますか。」

答 「そんなに多くはありません。」

問 「日本人をどう思いますか。」

答 「とても礼儀正しく親切な人たちです。」

問 「日本語をどう思いますか。」

答 「そう難しくはありません。」

問 「何を勉強していますか。」

答 「医学です。」

問 「どこで。」

答 「慈恵会医科大学です。」

問 「難しくないですか、講義にはついていけますか。」

答 「完全にはついていきませんが、何とかやっていけます。」

問 「帰国してから医師として開業するのは困難です。日本の医学学位は認められていません。これ以上日本にいても時間とお金の浪費です。もし私だったら、さっさと帰国しますよ。あなたはどう思いますか。」

答 「……」

問 「いつでも“帰国ビザ”を発行しますから、よく考えておいてください。」

答 「どうもありがとうございます。考えてみます。」

私たちは握手をした。彼の最後の言葉は、「知らせなさい」であった。言い換えれば、「帰国せよ」ということだ。日本への道を妨害したバンキナンの虎は、このオランダ総領事館のことを言っているのだろうと、私には思えた。これらの質問がオランダ語で、1時間近く丁重に行われた。それは私が演説をしてから、およそ2ヵ月たったころのことだった。予想外にも、私の演説についての質問は、ただの一つもなかった。

なぜオランダ総領事館は、もっと早くに私を呼び出さなかったのだろう。私の演説が記録

をとられたことは確かだ。多分演説文は、バタビアとオランダに送られたであろう。イギリス総領事館が、西欧帝国主義を批判する演説についての情報を集めていたことも考えられる。おそらくオランダ総領事館は、私に対してどういう措置をとるか、本国に照会中であつたのだろう。そのために時間がかかったのだろう。オランダとイギリスという二つの帝国が協力しあって、私に対処していたことは、1942年1月の半ばに、シンガポールのロビンソン街にあるイギリス情報部の“犯罪調査局”による尋問を受けたとき明らかになった。

それは2月16日のシンガポール陥落の1ヵ月前のことだった。いくつかの質問の中で、「日本で何か演説をしたことがありますか」と聞かれて、「はい」と答えた。取調べ官は私に質問しながら、赤茶けた数年前のアルバムを1ページずつ開いて見ていた。そして私とスジョノ先生、それにユスフ・ハッサンが、頭山満邸で共に撮っている1枚の写真を見せながら「この日本人を知ってますか」と聞いた。私は「はい」と答えた。私はロビンソン街の6号房に、10日間拘留された。これが1915年に見た夢の、最初のすすり泣きだった。

その7年前のアルバムは、オランダ総領事館からイギリス総領事館に、そしてさらにシンガポールの犯罪調査局に手渡たされたのだった。インドネシア留学生の中に、だれか私を監視していたものがいたに違いなかった。私は、第一にオランダ帝国、第二に大英帝国、そして第三にオランダとイギリスの両国に立ち向かわなければならなかった。それが、オランダ植民地から来た東京慈恵会医科大学学生の私の運命であった。

私の足を引っ張ろうとするオランダのやり方に、私はまったくうんざりさせられた。なぜオランダは、私を危険な学生だと見做したのだろう。バタビアでは、私はただ政治演説会に、熱心に出席していたに過ぎなかった。青年団体インドネシア・ムダは戦闘的な組織ではなかったし、私は普通のメンバーにすぎなかった。それに私は、民族主義指導者からも、宗教、教育団体の指導者からも、何の使命も託されて来てはいなかった。日本に来てから、アジア主義運動や文化活動の昼食会とか懇談会、社交的な集まりには顔を出していたことは認めよう。アジア人留学生の15人、20人が何の脅威だというのだ。本当に活動的だったのは、3、4人にすぎなかった。

日本での学位が認められず、帰国しても医師として開業できないとしても、私は少しも意に介さなかった。マレーの諺でも、こう言っている。「土の中の虫でさえも食物を得ることができる」と。「静かな反乱者」に対するオランダの仕打ちは、有名なオランダの刑罰についての表現を思い起こさせた。「もしあなたが私を捕えるなら、私の手足を打つがいい。もしあなたが私を追放するなら、できるだけ遠くに追放するがよい。もし私を絞首刑にするなら、できるだけ高く吊りさげよ。もし私の体を鉄砲と刀で惨殺するなら、できるだけバラバラにするがいい」。オランダに対して私は言った。「もし私の体から赤い血が流れ出たならば、パリアマンの熱い浜辺で乾くに任せてほしい」と。

モハマッド・ハッタ氏との出会い

1933年春の初め、『ジャパン・タイムズ』の第一面に、太く大きな字で「ジャワのガンジー、ハッタ氏、神戸に着く」とあった。

その記事はハッタ氏の政治的背景と氏が私的に来日した目的は、日本の家内工業やダンピングの実態、あるいは農業の機械化などを視察し、日本との貿易を向上させることにある、と書いていた（詳しくは『ハッタ回想録』（大谷正彦訳）めこん、1993年）。

ハッタ博士〔実際の学歴はロッテルダム商科大学修士〕が東京に着いたとき、私とマジッド・ウスマンは帝国ホテルで氏に会った。私たちと同じミナンカバウ人である氏は、バタビアのパッサル・スネンに拠点をおく実業家叔父アユブ・ライス氏に同伴していた。氏は私たちの健康、寒い気候に耐えられるかどうか、日本社会に適応できるかといったことをあれこれ尋ねた。私たちは、上々だと答えた。「日本人やオランダとの間に、何かトラブルはないか」と聞かれたので、「今のところ別にあります」と答えた。漢字が難かしいと言うと、氏は漢字は最も難しいし、一生懸命勉強しなくてはならないものだ、と同意した。また専門をきかれたので、私は「医学」と答え、マジッド・ウスマンは「経済学」と答えた。氏は私たちに、よく勉強し、体にも気をつけるようにと激励してくれた。

ハッタ氏は私に、一緒に日光見物に行かないかと誘ってくれた。私は、この夢のようなすばらしいチャンスに飛びついた。ハッタ氏には前オランダ大使、佐藤正（ママ）氏の秘書の岩田氏（音訳）が同行していた。岩田氏は与党、民政党に所属しており、またハッタ氏のよい友人だった。ハッタ氏の日光見物は、岩田氏の招きによるものだった。私たちは汽車を利用した。日光に向かう車中、私はハッタ氏に、日本の現在のアジア政策をどう考えていくのが良いか、と尋ねた。氏は、おおよそ次のような助言をくれた。「政治的分野では、私たちは慎重であるべきだ。日本は経済強国である。政治は常に経済と結びついており、それを分離することは難しい。私たちはもっと、自由で進歩的な理想主義的なグループと接触をもたなくてはならない。何の意図もなしに援助を与えてくれる国など、どこにもない。私たちは、自分たちの自助自立の信条に拠らなくてはならない。」

また蘭領ニューギニア（パプア）の開発と、日本の深刻な人口問題についての質問には、「ニューギニアは巨大な未開発地域である。そこには鉱物資源や森林資源が眠っていて開発を待っている。オランダには開発資本がないし、私たち自身はまだあまりにも力不足だ。森林開発は日本が行うのがいい。日本は資本も技術も持っている。ニューギニアは、もし開発されなければ何にもならない所だ」と述べた。

日光に着くと、私たちは東照宮やその他の神社や寺院を参拝し、それから美しい森林を楽しむながら中禅寺湖へと向かった。その森は、まさに18年前夢の中で見たものだった。

中禅寺湖のほりで軽く食事をして、少しばかりのおみやげを買った。帰路は車を利用し、途中休息のため熱海（ママ）に立ち寄り、夜になって東京に着いた。汽車と車とで疲れた旅行だったが、私はその旅をととても楽しんだ。ハッタ博士との最初で最後の、東京郊外への旅

だった。樹木におおわれた丘を抜け、曲りくねったジグザグ道を行く…それは魅力的な眺めだった。そしてとても明るく見えた。

ハッタ博士と R. ビハーリー・ボース氏との会見は、あくまで私的なものであった。ハッタ博士から、R. B. ボース氏を知っているかと尋ねられたので、私は、彼には日本文化連盟でいろいろな機会に会っていることを話した。彼はとても喜び、会見の手はずが整えられた。私はハッタ博士を、青山のボース家へお連れした。私たちは時間通り、10時半に着いた。私は控えの間で待っていたので、2人の指導者が余人を交えず、何を話したかは知るどころではなかった。しかし、それぞれの国の独立運動の戦略とアジアにおける日本の役割が、中心的な話題となったことはまちがいがなかった。2人の会見は、およそ、1時間に及んだ。

ハッタ博士が帰国してから約半年後、彼がオランダ政府によってバンダネイラ島に追放されたというニュースを聞いた。そのニュースは日本でも報道された。ハッタ博士の友人達やインドネシア独立運動の支持者たちは、オランダがハッタ博士の訪日直後にきわめて強硬な行動に出たのには、何か他の理由があるに違いないと考えた。私はショックを受けた。1週間の東京滞在中、博士の時間は、家内工業の見学、早稲田大学での講演、日光旅行、ボース氏との会見などの社会的活動によって占められており、その事を私はよく知っていた。

ハッタ博士は民政党の佐藤氏の親しい友人であった。そのため民政党首脳と意見をかわしたことが、わざわざしたのかもしれない。また聞くところによると博士は、満州国を視察するよう荒木貞夫大将 [陸軍大臣] から招きを受けたが、それを断わったともいわれる。

佐藤氏を訪問した時、ハッタ博士の流刑状況について尋ねられた。監視の目はどれくらい厳重なのか、博士に行動の自由は許されているのか、あるいは伝言を託すことのできる信頼し得る者がいるかどうかということであった。非常に残念ながら、バンダネイラ島の住民とは何の接触もなかったので、私は情報を提供することができなかった。私はどうしてこういった質問をするのか尋ねてみた。すると佐藤氏は顔を朱にししながら激しい口調で言った(以下6行原文日本語)。

「ハッタ君をよく知っておる。立派な人です。オランダ人がずるいんだな。悪いことをした。馬鹿だな。これはいかん。」

私は頭をさげた。すると佐藤夫人は、「本当にお気の毒です。インドネシアに対して非常に残念です。惜しいことです。」とわずかに頭をさげながら三回繰り返して言った。夫人は目を泣きはらして悲しんでいた。私も悲しかった。佐藤夫妻が言った。「ハッタ君を助けようと思います。」

私は、どうやってハッタ博士を救出するのか尋ねた。佐藤氏は、バンダネイラ島の近くを時々通る日本の漁船をまず利用し、そのあと博士を日本に連れ出す船を待機させる案を打ち明けた。私たち3人の間に沈黙があった。私は自問した。「ハッタ博士はこの申し出を受けるだろうか。博士は高潔な人だ。それにインドネシアの人々の反応はどうだろうか。」話し

合いを終えるとき、佐藤氏は「考えましょう。」と言った。私は佐藤夫妻に、ハッタ博士に対してだけでなく、独立のために闘っている他のインドネシア人にも同情してくれることに礼を述べた。その話し合いは、およそ1時間にわたった。最も肝心なことは、いかにしてハッタ博士を漁船に移し、そこから待機中の船に移すか、という手段と方法だった。失敗は許されなかった。しかし、その会見以後、さらに進んだ具体的な話し合いはされなかった。私はその計画がどこまで具体化したのか知らない。今は亡きハッタ博士は、このことを何も知らなかつたらうと思う。

ある人々にとっては、ハッタ博士の訪日は好ましからざるものであった。博士が日本に来た時は、日本と蘭印政庁の経済関係が緊張していたときであった。蘭印政庁は、安価な日本品の流入を阻止しようとしていた。彼らは、日本はダンピング政策をとっている、と非難した。オランダ人の商売は日本に押され気味であった。

それに加えて蘭印政庁は、経済的にも政治的にも日本を疑っていた。インドネシアでは民族運動が燃えさかっていた。それに対してオランダは鉄血政策をとっていた。政府当局が極度に恐れていたのは、日本が蘭印の独立運動を支援し自由で主権をもつインドネシア国が樹立されるということであった。

他方、日本の関係者は蘭印を最大の市場とみていた。彼らはでき得るかぎり、オランダと友好関係を保持しようとしていた。貿易面で提携関係をもつことは、日本側にとって利益のあることであった。

当時、日本の南進熱は非常に高まっていた。南方はまだ未開拓であり、天然資源に富むと考えられていた。こうした状況の中で、日本は自らの利益のために、きわめて注意深い態度をとっていたのは無論のことであった。

日本のリベラルで、進歩的で、理想主義的な知識人にとって、道義面でハッタ訪日は満足のゆくものであった。さらにハッタ博士の闘争に対する彼らのモラル・サポートは、大変大きなものであった。それは、たとえばハッタ博士を流刑地のバンダネイラ島から救出しようと、佐藤氏らが計画したほどであった。

私たち留学生は大変誇りに感じ、また自尊心を高めることができた。私たちは、植民地の蘭印からではなく、祖国インドネシアから来たのだと感じた。それまでの劣等感や屈辱感が消え失せ、民族的な誇りをもつようになった。インドネシアの諺でいうならば、「座るも立つも相手と同じ高さ」であった。

ハッタ博士が大阪に発つ前、私は一通の手紙を託され、中を読んでもかまわないと言われた。博士の頼みというのは、パダンにある日刊紙『ラジオ』にその手紙を送ってほしいということであった。

その手紙の中には、家内工業的、相互扶助的な村落工業の歴史的発展に関する、ハッタ博士の見解が述べられてあった。それによれば、こうした東洋的方法は、インドネシア各地の村落で行うことができるというのだった。それ故に、ハッタ博士は、西スマトラのカユ・タ

ナムにある唯一の技術学校の校長エンク・モハマッド・シャフェイ氏に、日本に来て村落工業の実態を間近に視察したらと、その手紙の中で勧めたのであった。

村落の初歩的な工業は大規模な工業を発達させるための重要な前提である、というのがハッタ博士の考えであった。博士によれば、工業と農業は平行して発達しなければならない、というのであった。農業を無視し工業を優先したり、あるいはその逆は、国民経済を畸型化するというのであった。博士は、日本が急速に発達し強い経済的地位を得たのは、何よりも工業と農業が均衡して発達したからだだと分析していた。インドネシアでも、そうした経済発展のあり方を強く希望していたのだった。

私に託して送られたハッタ博士の手紙にもかかわらず、やむを得ざる理由でエンク・モハマッド・シャフェイ氏が日本を訪問することができなかったのは、かえすがえすも残念なことであった〔後藤乾一、前掲書、第8章を参照〕。

竹井十郎氏との交遊

日時はさだかでないが、ある朝10時半頃、私は赤坂に住む竹井十郎氏〔号、天海〕を訪ねた。日本の茶菓を楽しむながら、私は竹井氏の子息の教育について尋ねた。彼はいく分怒ったような顔付きでこう言った。「私は、息子を海軍兵学校に入れました。卒業したならば、私は彼に蘭印行きを命じようと思っています。軍艦に乗って、オランダ海軍を壊滅させるためです。息子がたとえ犠牲になっても、それは構いません。私は、是非とも息子が、日本海軍の英雄的精神を自覚してほしいと思っています。」

私は竹井氏の言葉を聞いて、とても感動し頭が下がる思いだった。その精神が横溢した言葉は、私の胸の中にしみ込んだ。そして独立を希求するオランダ植民地からの青年として、一人自問した。「一人の日本人が、自分の愛する子供を犠牲にしてまで、オランダと戦わせ、私の祖国と民族の独立を望んでいくくれるのだ。」

私たちは押し黙った。竹井氏は蘭印政庁に対する憎しみをじっとこらえているかのようであった。しばらくたってから、竹井氏は蘭印政庁から“好ましからざる人物”とみなされ、著述家としてふたたび入国することを禁止された経緯を語った。竹井氏は、1930年代のオランダの政策をきびしく批判する評論家であった〔竹井十郎『蘭領印度を語る』平凡社、1935年、竹井修『枯葉日記・第一次日蘭会商筆禍記者の百十日』村松書館、1985年参照〕。

私たちは、さらに「土人」という日本語についての私の考え方をめぐって、話し合いを続けた。その「土人」という言葉は、蘭印の人民を語る時いつも用いられていた。私は思っているままに、「土人」という言葉が好きではないと語った。この語には、蘭印の人民がまだまだ文化程度が低い、というかのような響きがこめられていた。私は、竹井氏に「土人」に代ってインドネシア人という言葉を使ってほしいと申し入れた。

竹井氏は笑いながら、そうしようと約束してくれた〔この点については、竹井十郎『インドネシア—蘭印の実態』岡倉書房、1941年を参照〕。私はお礼を言った。満足だった。こ

の私にとっては歴史的な意味をもつ会話は、1時間ほども続いた。竹井氏の机上には、インドネシアから購入している『プマンダンガン』、『ピンタン・ティムール』、『ジャワ・ボーデ』などの新聞が拡げられてあった。

12時頃、私は竹井氏御夫妻に別れを告げた。帰り際、竹井氏は「お大事にして下さい」と声をかけてくれた。

私は竹井氏が主宰する『南方情勢』誌が、インドネシア人という言葉を使っているのを見て満足を感じた。そこには次のように書かれていた。「インドネシアからの留学生たちは、土人という言葉は、自分たちを侮辱するものだと感じている。留学生は自尊心、祖国と民族を愛する民族意識をもっており、われわれはそれを尊重しなければならない。」こう言って竹井十郎氏は、土人という語に代わりインドネシア人という言葉を使用しようとして、作家や編集者に呼びかけていた。他の分野では、どの程度その言葉どおりの実行がされたのかは、私には分からない〔竹井については、後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』第4章を参照〕。

私は、この一件をサレカット・インドネシアの仲間には知らせなかった。土人という言葉に対して、不快感をおこさせたくなかったからである。いつの日にか、インドネシア人という言葉が、会話の中でも文章の中でも高らかにひびきわたるであろう、と信じていた。

1933年末に日本を訪れた『ピンタン・ティムール』紙のパラダ・ハラップ主筆から、私たちは、今まであまり知られていない、東洋で最も進んだ国で勉強する大変勇気のある学生だとほめられた。

「この国にはわれわれの国が是非とも必要としている、吸収すべき実用的知識が山ほどある。この黄金の機会を逃してはいけない。これを最大限に生かしなさい。あなたがたが母国に帰れば、その得て来た知識は、人々に大きな恵みをもたらすのだから。日本の足跡を学びなさい。彼らは勤勉な国民だ。一生懸命勉強しなさい、そうして成果をおさめて帰国すれば、私たちは、あなたを暖かく迎えるでしょう」とパラダ・ハラップ氏は励ましてくれた。大亜細亜大会の模様とサレカット・インドネシアについては当然、氏を通じて広く報道されるに違いない。

パリンドラ党総裁ストモ博士一行の来日

私たちは、1936年春、ストモ博士と民族銀行頭取ブンドロ・スジョノ夫妻の歓迎準備のため多忙をきわめていた。それは視察と観光とを兼ねた旅だった。ストモ博士は、日本の国力の秘密を知ること、そしてそれがインドネシアにも適用できるかどうか、に大きな関心を持っていた。ブンドロ・スジョノ氏は事業に関心があったしその夫人は買い物を楽しみにしていた。ガイド兼通訳として、私たち一スミント、ユスフ・ハッサン、スウィト、スジト、サリムと私一は交替で、毎朝9時に客人たちを京橋ホテルに迎えに行き、夕方6時から6時半にはホテルに送り届けた。

銀座でブンドロ夫人と靴磨きとの間に、ちょっとした事件があった。夫人が靴を台の上に

置いたとき、靴磨きはその靴を磨く素振りも見せなかった。夫人は自分の靴を磨くようにと指さしたが、靴磨きは首を振って拒絶した。がっかりして彼女は、私にどうして断られたのか尋ねた。私は答えなかったが、理解できた。そこでブンドロ夫人は不満をもらした。「日本では女性は男性よりも劣っていると見なされているんですか。なんておかしい事でしょう。」私はただうなずいた。

東京での5日間を終え、私はその客人たちを案内して京都に行き、京都ステーションホテルに泊まった。私たちは金閣寺、銀閣寺、京都公園^(ママ)を訪ね、すき焼きを味わい、たくさんのお店が並んだ通り(名前は忘れた)でおみやげを買った。京都から名古屋へと旅行を続けた。私たちは特別に、映画の撮影所やろくろによる家内陶器製造などを見学することができた。私たちは疲れて東京に戻った。客人たちは豊かな文化を持つ古い都市京都と、小さな家の中で作られる名古屋の手工芸品の磁器に感銘を受けた。

「私はこの家内工業をインドネシアに紹介したい」とブンドロ・スジョノ氏は言った。

客人たちが帰国する前の晩、スミントとユスフ・ハッサンと私は、ストモ博士とブンドロ・スジョノ夫妻に、銀座の不二家レストランに夕食に招待された。洋食が出された。食事が終わってから、ストモ博士に「日本の印象はいかがでしたか」と尋ねた。博士は、「誰もが黙々と実によく働いている。不平も言わず、いやな顔一つしないで、上からの押しつけがなくても、いつも笑顔で、幸せそうにまじめに働いている。日本人はとてもよく働く人たちで、強くまとまっている。天皇に対してとても忠実で、犠牲的精神を持っている。こうした日本がもっている国民としての自覚は、コーランの教えにもあるのだ。日本人は日常生活の中でそれを実践している、私たちインドネシア人はコーランの教えを持っている、しかし……。」ここでストモ博士は言葉を切り、終わりまで言わなかった。ストモ博士と私は、お互いの顔を見つめあった。私たちはその「しかし」という言葉にこだわっていた。2人とも深い無念の気持を持ちつつ、同じことを考えていた。

しばらくして、私たちは食後のコーヒーを啜った。ストモ博士は、少し恥ずかしそうに顔色を変えた。今度は彼が「何か祖国に伝えたいことがありますか」と私に質問をした。私は驚き、ショックを受けた。「インドネシア最大の政党の一つ、パインドラ党の総裁、ストモ博士を通じての4500万のインドネシア人へのメッセージですって!？」私は自問した。なぜストモ博士はこの私を、影響力のある大指導者と見做すのだろうか。『ビンタン・ティムール』紙上の、大亜細亜大会と私が組織したサレカット・インドネシアについての大きな報道によって、私の名がインドネシアでよく知られるようになったのだろうか。私は何者だろうか。私は、解剖学や細胞学、薬学の勉強で忙しい、東京慈恵会医科大学の3年生である。私ははにかみながら答えた。

「統一はとても大切です。今のところ、私たちの国には真の国家的統一がなく、私たちはバラバラに分割されています。これは大変残念な状況です。日本国民の国家的統一と犠牲精神を見て下さい。国の名誉のためには、個人の生活はなんとも思われたいのです。国家が個

人の上にあります。私たちは日本に学び、日本を手本としてゆくことができます。」

ストモ博士はうなずいた。博士は私たちに、よく勉強するように言い、祖国に私の言葉を伝えることを約束した。もう大分時間も遅かった。私たちは、客人たちを京橋ホテルに送った。次の朝、私たちは一行に別れを告げた。

松島訪問

東京駅でアメリカ人ジャーナリストのガートラーという人と、偶然知り会った。彼は日本語が話せず困っていた。私が自己紹介して手助けを申し出ると、彼は近く仙台に行きたいのだと言った。彼は誰かが同行してくれることを望んでいた。私と一緒にしてくれる気があるかと尋ねたので、私はその誘いを喜んで受けた。日本の名所旧蹟を見て歩きたいと、故国を発つときから思っていた。

1936年の春休み、私たちは朝のうちに上野を発って、仙台に向かった。私は車窓からの景色と、見渡す限りの水田を見て楽しんだ。工場の煙突で風景が遮られていた南部〔名古屋、関西方面〕への旅と、何と対照的なのだろう。「東京の南には工業があり、東京の北には水田がある」と言われるが、まったくその言葉通りだった。私たちは夜の8時に仙台に着き、駅前の仙台ホテルに泊った。翌朝私たちは街の中心を一巡した。その商店街は、もちろん銀座とは比べものにならなかった。川のむこうに広い野原に囲まれた東北大学の堂々とした建物が見えた。昼どきにはホテルに戻った。私たちは街をくまなく見て歩いたわけではなかった。疲れていたし、狭い通りは街灯がうす暗く商店も閉っていたので、夜はほとんどホテルから出なかった。

次の日、私たちは小さな漁港、塩釜へ行くために車を雇った。道はまっすぐに延びていた。私は、塩釜は何代も受け継がれてきた伝統的な炭焼き業が大切に残されていると聞いていた。私たちは途中、ある村(名前は忘れた)に立寄った。無造作に門を入れて「ごめんなさい」と言うと、白いエプロンをつけた50歳ぐらいの婦人が、丁寧なお辞儀で迎えてくれ、「よくいらっしゃいました。どうぞお入りください」と言った。彼女の親しげな歓迎ぶりは、他ならぬこの村が外国人たちが多く訪れることで有名な所だ、という印象を与えた。私たちは畳の上の座布団に座り、日本茶とお菓子が出された。そこは16帖もある大きな部屋だった。そのお内儀さんは、塩釜について私たちが何を知りたいのか分かってくれて、炭焼き産業は何百年も前に始まったことを説明してくれた。それは世襲的に受け継がれた職業であること、炭は仙台市や近隣のすべての村々までまかなっていることなどと教えてくれた。またすべての家庭の一人一人が、皆この産業に係わっていること、つまり「家族全員の職業」だと言った。電気の普及の結果、将来どうなるかと尋ねると、彼女は「まだまだ続けてやっていけますよ」と答えた。お内儀さんの丁寧な暖いもてなしに、心からお礼を言った。彼女は最後に「またいらっしゃい」と言った。ガートラー氏は、その村の女性の親切と丁寧さに、深く心を動かされていた。おそらく日本の村でこんなに暖く、真心のこもった歓待を受けた

初めての経験だったのだろう。私はと言えば、まるで自分が日本の塩釜ではなく、スマトラの自分の村にいるような気がした。今日に至るまで、私はあの村の親切な婦人のことをはっきりと覚えている。

私たちはその村から塩釜へと向かい、11時頃無事に着いた。漁船で賑わう漁港に面した茶店でお茶を飲み、お菓子を食べた。私たちは12時半頃フェリーに乗り、松島に向かった。途中、透き通った紺青の海を背にした、満開の桜におおわれたおびただしい数の岩に魅了された。それは本当にすばらしかった。桜の木はまるで人の手で植えられ、手入れされているかのようなだった。“世界の七不思議”に次ぐものと言えよう。

昼過ぎに松島に着き、その夜は海辺の松島会館に泊った。夕食にはすき焼きを楽しんだ。ガートラー氏は食事は楽しめたが、熱いお風呂にはいることはできなかった。私はそれを笑い、彼も笑った。私たちは畳の上に布団を敷いて寝た。きっとガートラー氏は、この北日本の宿で初めて畳の上に寝る経験をしたのだと思う。彼はその夜ゆっくり寝つけないようだった。

翌朝、私たちは人のいない松島の街並みを歩き、海や海岸や美しい桜の花をたくさん写真に収めた。3日目に私たちは、松島会館の管理人老夫婦に別れを告げて、仙台まで車で戻り、そこから東京まで汽車で帰った。

東京慈恵会医科大学の3年生になるまでに、南は宝塚から、北は松島まで約3500キロメートルも旅行したことになる。ミナンカバウの諺でいう「一度サンパン(ママ) (小さな木製のカヌー)を漕げば、二つ三つ島をゆくことができる。一度ポケットを開けば、借りの2、3倍は片が付く」ということだ。

3ヵ月後に、『マンハッタン・シティ』という題の本をガートラーさんから受け取った。

「心と心の結びつきは田舎から始まります」ということだ。

学外での社会活動

東京慈恵会医科大学の1、2年の間に、私の学外での活動は大きく広がった。私は日本文化連盟から3キロほど離れた国際文化振興会〔国際交流基金の前身〕をよく訪れた。その図書室には、主に英語で書かれた日本や日本人についての書物がたくさん揃っていた。私は歴史や神話、それに日本の経済的進歩についての本を読んだ。上手な英語を話す井上氏と岡部氏は、私が日本のことをもっと勉強するための参考書選びを手助けしてくれた。

淀橋の宿舎に帰る途中、私は及川教授のお寺に立ち寄った。氏はマレー語を非常に習っていた。私は週2回、5時から6時半まで教えた。氏は立教大学の教授で、戦時中昭南島(シンガポール)で軍服を着ているのに会った。

佐藤正夫人は、オランダを離れて以来忘れかけていたオランダ語の勉強を再開したいと望んでいた。夫人はもともとかなり上手にしゃべれたが、しばらくするとみるみる上達した。

時々私は東京外国語学校に、プルワダルミンタ先生を訪ねた。そこで、私はヒンドゥー語

講師のベルラス教授、オランダ語の神田教授、同じくオランダ語の朝倉〔純孝〕教授にも会った。私は朝倉教授に頼まれて、オランダ語の本を数ページ読み、先生は私の発音やアクセントや抑揚にじっと耳を傾けていた。おそらく、かつてオランダにいた朝倉教授は、オランダ語を聞き取る力を磨きたいと望んでいたのだろう。朝倉教授の紹介で、ジョーホルの سلطان のよき友人である徳川義親侯とも知ることになった。また、インドネシア語の専門家である藤本〔宇治〕武夫先生にも、ときどきお目にかかった。

私たちは、黒龍会の指導者頭山満先生の愛国精神について、かねてからいろいろ聞いていた。私たちは翁を表敬訪問し、励みにしたいと思った。通訳が「こちらが東京外国語学校のマレー語講師としてジャワから来たスジョノ氏、こちらが東京慈恵会医科大学の学生でスマトラ出身のガウス君、そしてこちらがスマトラ出身のユスフ・ハッサン君」と一人一人紹介してくれた。頭山満翁は頷いていた。その通訳は、私たちの出身国は「蘭領東インド」と呼ばれていると言った。私たちは植民地の臣民として、また独立のため闘っている民族主義者として紹介されたことを理解した。頭山満翁は頷き、よく分かったというように私たちを見まわした。そしておだやかに長い灰色のあごひげを右手で撫でながら、「アジアのどの国も独立せねばならぬ」と言った。私たちは、その短い心の琴線に触れる言葉に力づけられ、頭をさげた。そして多忙の翁の時間を取ったことをお詫びした。記念の写真も撮られた。その表敬訪問はおよそ30分で終わった。1942年の1月半ばに、後述するシンガポールのロビンソン街にある英国犯罪調査局で見せられた「アルバム」の写真は、この時写したものだだった。

頭山満翁は非常に尊敬されている、そして力のある愛国者で、日本帝国とその国民の運命を深く心のうちに考えている人であった。良く知られているように、翁は1904年、大ロシア帝国への宣戦布告を躊躇していた政府に圧力をかけ、それが1905年に日本に勝利をもたらした。ほとんどの日本人は、その勝利が自分たちのものだとは信じられなかった。

イギリス政府が、R. ビハーリー・ボース氏を引き渡すように、日本政府に圧力をかけた時、翁はその庇護のもとにあったボース氏を引き渡すことをきっぱりと断った。ボース氏が政治的避難所を得るまで、日本政府は翁に何一つ手出しすることができず、イギリスの要求は通らなかつた、と私たちは聞いていた。

大学での講義

大学で学ぶ学術用語は日常用語とまったく違っていた。ふだん友達と日本語で話して理解しあえるということと、教室で教授の講義を理解することとは完全に別問題であった。生化学の講義は中山教授、生理学は浦本教授、細菌学は寺田教授であったが、その講義を聞き始めてから私は、医学用語をできるだけ早くマスターしなければならないということを悟った。それで、講義の途中で何度も出て来て、しかも私がよく分からない単語をすべて書きとめることにした。この当時の私にとって図書館は私の第二の教室であった。私ははっきりしないところ、聞きとれなかつたところを補うためにドイツ語の教科書を読みかえた。友人

や助教授の先生方も非常に親切に私を助けてくれた。講義のあいだ私は黒板に書かれたことは、漢字を除いてはすべてノートに書き写した。しかしノートは方々が欠けていて意味をなさないといてもよかった。

月日がたつにつれて私は次第に専門用語にもなれてきて、講義の内容の理解も15パーセントから20パーセント、それから30パーセントというように進んできた。もうまったくお手上げ、という状態を脱しえたことは嬉しかったが、それを早く40ないし50パーセントにしたいと思った私は、中学や高校でやっていた時間割を使うことを思いついた。すなわち、朝8時半から12時半までは大学、2時半から4時半までは、講義のない日は必ず図書館です。7時から9時半までは自習、10時就寝という1日のスケジュールである。これは非常に助けとなった。私はだんだん講義についていけるようになった。そして3年生になるころには理解力も非常に増していた。中村教授の解剖学の講義は分かりやすかった。

骨格、関節、筋肉、神経等の絵が黒板に描かれ、ラテン語、ドイツ語あるいは漢字で説明が書かれた。中村教授は大きな声で講義されるのではっきりと分かり、注意力を集中して聞くことができた。

村田教授の組織学では赤や黄や緑の色をたくさん使って個々の細胞の特性が説明された。私はその絵をいまも記憶しているし、内容も分かりやすかった。しかし顕微鏡下で見わけるのは大へんだった。

片山教授の整形外科では、脱臼、単純ないし複雑骨折、レントゲン写真、こぶや痛み、患部、ギブスの技術その他の綿密な観察が要求された。片山教授が、患部の足にギブスをする時には、その足をちゃんとした位置一歩く足の角度に持ち上げる一に置かなければならない、と説明されたとき、私は自分にそれができるだろうか。私はこんなに小さいから、それだけの力があるだろうか、と自問自答した。

加藤教授の内科の講義はきわめて明快であった。教授は低いはっきりとした声で、ポイントも要点をついた説明だった。ノートもとりやすく、何時間きいていても疲れなかった。講義は長ければ長いほど興味深かった。講義中教室は静まりかえっていて、先生の声のほかは針一本落ちてでも聞こえるかと思うほどだった。

眼科学は村上教授、耳鼻咽喉科学は佐藤教授、外科学は佐藤教授、泌尿科学は渡辺教授、婦人科医学と産科学は児玉教授、心理学は高良教授、皮膚医学は土井教授、小児科学は石川教授で、それぞれの先生の講義はかなりたやすく吸収できたが、木村教授の病理学はむずかしかった。講義の口調が非常に早かったし、講義のあとで私はいつも図書館へ行き、アースケヌフの教科書を読んで、いったいどんな内容が話されていたのかを探らなければならなかった。そしてノートをとれなかったところはそれで補足した。そんなわけで私は木村教授が教室へ入ってみると何となく神経質になってしまうのだった。もう一つ私にとっての難題は、診察室で児玉教授の症例を調べることであった。私にはどうてい子宮鏡は使えなかった。私は仲間にそれを使わせ、目を半分とじて横からのぞいた。恥ずかしかったのである。

私のノートには、ただ、子宮内膜症、膣、妊娠2、3ヵ月、などと書いてあるだけだった。私は講義はすべて50ないし60パーセント理解することができた。ただ1年生のときに聞いた金継教授のお釈迦様や日本仏教についての講義は15パーセントくらいしか分からなかったし、3年のときの木村教授のも35パーセントほどしか分からなかった。金継教授の講義については図書館にも参考にする書物がなかった。

私は1年生のとき以外（その頃は最後列）いつも教室の一番前に席をとった。これは幼稚園のとき以来の習慣だった。そうすると教授には、私が色が黒い上に小さいのですぐ目についたのである。私は1934年から35年にかけての冬はぜんそくに悩まされたが、それでも1日も講義を休まなかった。

最前列にいれば講義もよく聞きとれたし、黒板の字もはっきり分かり、ノートをとるとき間違はずもなかった。私はいつも注意深く講義をきいた。特に春の気候にオゾンの関係で稲妻や雷が鳴ったあとでは居眠りをしないように気を張っていた。

私の席は規律の席であった。「気を付け！」「敬礼！」という声で私たちは立ち上り、頭を恭しくたれて教授に敬意を表すのだった。それは簡単な儀式だったが、私のそれまでの学校生活では経験したことのないものであった。

一つの講義が終り、休み時間がすぎると私はまた元の戦略的な最前列の席に戻った。もしかしたらそれだけの努力に対して教授が少しは良い点を与えてくれるかもしれないと、ひそかに希望もしていた。「真面目な生徒です」といわれればそれだけでも私にとっては有意であった。特に私は外国人学生だったからである。友人のフィリピン人学生、アニャラクとサルトはいつも最後列に座っていた。

私は林教授の診療事例の時間は必ず出席し教授の説明に耳を傾けた。日本語の文章にときどき「ディ・克蘭ケ」[患者]、「フィーバー」[熱]、「シュメルツ」[痛み]、「フステン」(せき)などのドイツ語がまじるので、どういうわけかと級友に聞くと、それは「患者に病気の種類をさどられぬため」だと聞かされた。ドイツ語の混用は私にとっては好都合だった。私は白衣を着てえらそうな顔で聴診器を持って、日本語で患者の診察をした。まさに級友たちという“医者”になったのだった。日本では英国式の医療制度をドイツ式にきりかえた、と私は聞かされた。

卒業試験に合格

図書館はいつでも満員でしかもシーンと静まりかえっていた。卒業試験まであと数ヵ月しかない。試験は筆記と口答と両方だった。それに合格するには一生懸命勉強しなくてはならなかった。私はいままでのノートを調べなおし、教授たちが強調した、私がアンダーラインを引いたところを特に注意しておぼえる努力をした。試験の問題にどんなのが出そうかと山もかけた。神経システムについての講義のときの示唆や錐体骨の重要性の強調はよいヒントになった。

試験が近づくと、私はいささか神経質気味だった。だがきっと合格できるという自信があった。私は系統立てて勉強してきたし、講義も1回も休まなかった。私の目標は、質問の少なくとも50パーセントに正解を出すことだった。私の計算によると内科は5、60点前後、病理学で50点前後、外科でも50点前後はとれるはずだった。そこで私は落着いて試験に臨んだ。まずまずうまく行って、はじめの予想点はとれると思いが楽になった。しかし口答試験はさんざんだった。林教授は45歳男性患者の黄疸症例を出された。眼球にも顔にも身体にも、黄疸症状が明らかにしている。水腫も顔、腹、手足などに見られる。肝臓も腫れている。林教授は、この患者に対する診断はどうかとたずねられた。「感染性肝炎です」と私は元気よく答えた。すると教授も助教授も顔を大きくほころばせた。私がびっくりすると、教授は「この患者はアフリカで蚊の媒介する黄疸病にかかっているのです」と説明された。ショックだった。「アフリカの黄疸病ですって。初めての症例です。この人はいつアフリカから帰ってきたのですか」と私は思わず呟いた。口答試験は落第だ！ だがほっとしたこと、級友たちもみな同じ回答をしていた。間違っただけは私ひとりではなかったのだ。

1ヵ月すぎた。まだ何の発表もない。私は落着かず不安になった。1939年2月末ごろ私は思いきって事務所の山川氏に結果を聞いてみた。答はただ「待ってください」だけだった。私はがっかりして事務所を去った。級友たちは診療所の方で忙しく働いている。私は何もすることがなかった。3月の半ば、待ちきれなくなった私はまた事務所に聞きに行き、また同じ返事をもらった。試験はよっぽど不出来だったのだろうか。もう1年落第か、と私は自問自答した。貴重な、限られた時間を空費することになると思うととても悲しかった。私は質問の答の半分はドイツ語で書いた。それなのにまだ結果が出ないとは！ 私はまた山川氏を訪れた。ドアをノックすると、山川氏がにこにこ顔であらわれ「おめでとうございます」と言ってくれた。私はお辞儀して、東京慈恵会医科大学医学士の免状を受けとった。それはもう3月末のことだった。私は山川氏にお礼をいった。山川氏は遅れた理由として、私に医学士の学位を授けることについて、各関係者の会議の結果を待っていたのだ、と説明してくれた。「初めての例ですからね。」

私は山川氏に、何度もうるさくたずねたことの詫びをいった。免状を手にした私は最高に幸せだった。山川氏はさらに、私は143人中で34番の成績だったと教えてくれた。私は80番か90番だろうと予想していたのだった[慈恵会医科大学学籍課からのご教示によると、ガウス氏の学生の卒業式は1939年3月25日であった]。

私はすぐに父に医者になれたと電報を打った。2週間もしないうち、父からおめでどうの手紙がきた。私はパリアマンの母にも手紙を書いた。ミナンカバウの年とった人びとは成功を祝うとき、次のような言い方をするのだった。「シュクル・ジャディ・オラン。ベルトゥア・イブ・メンガドゥン！」(アッラーに感謝！ 男になった。母の身ごもりの神聖さよ。)

学位取得後数週間して、私は助教授(お名前は忘れた)から、2年先輩の小児科医である山王博士に紹介された。博士の山王病院は伝染病専門で信濃町駅の真向いにあった。私は午

後6時から翌朝までの受持ちで、病院で夜をすごした。朝になると午前中は慈恵病院の内科で手伝い、午後3時から5時までは東洋病院伝染病科で働いた。ここではチフス患者や、赤痢、ジフテリア、その他の病気の患者を観察した。私は限られた時間内に早く、できるだけ広範囲の医学の知識を吸収したいと思ったのである。実地の経験は山王病院で積むことができた。10歳の嗜眠性脳炎にかかっていた男の子に腰椎穿刺を行って成功した。この病気は当時千葉県下ではやっており、山王博士の病院では患者が100パーセント治っているというのが博士のご自慢で、そのことは新聞でも報じられた。